

【 復活のトロパリ 第7調 】

ハリストオスか みよ、なんぢはじゅうじかにてしを
 神 爾 十 字 架 死
 ほろぼし、とうぞくのためにくえんをひ
 滅 盗 賊 爲 樂 園 開
 らき、けいこうぢよのかなしみをなぐさ
 攜 香 女 悲 慰
 め、しとになんぢがふくか つして、せか
 使 徒 爾 復 活 界
 いにおおいなるあわれみをたまいしをつたえ
 大 憐 賜 傳
 させたまえり。

【 十字架叩拜の讃詞 第1調 】

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢ
 主 爾 民 救 爾
 のぎょうにふくをくだせ、わがくにを
 業 福 降 我 國
 つかさどるものにてきにかたしめ、なんぢ
 司 者 敵 勝 爾
 のじゅうじかにてなんぢのすまいをまもり
 十 字 架 爾 住 處 守

た ま え 。
給

【 十字架叩拜の小讃詞 第7調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い
光 榮 父 子 聖 神 歸 す 、 い 今

ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
何 時 世 世

ほ の お の つ る ぎ は す で に エ デ ム の も ん を ま も ら
焰 劍 既 門 守

ず 、 け だ し こ れ を し り ぞ く る し え い な る じ ゅ
蓋 之 卻 至 榮 十

う じ か の き は い た れ り 、 し の は り お よ び
字 架 木 至 死 刺 及

ぢ ご く の か ち は ほ ろ び た り 、 け だ し な ん
地 獄 勝 亡 蓋 爾

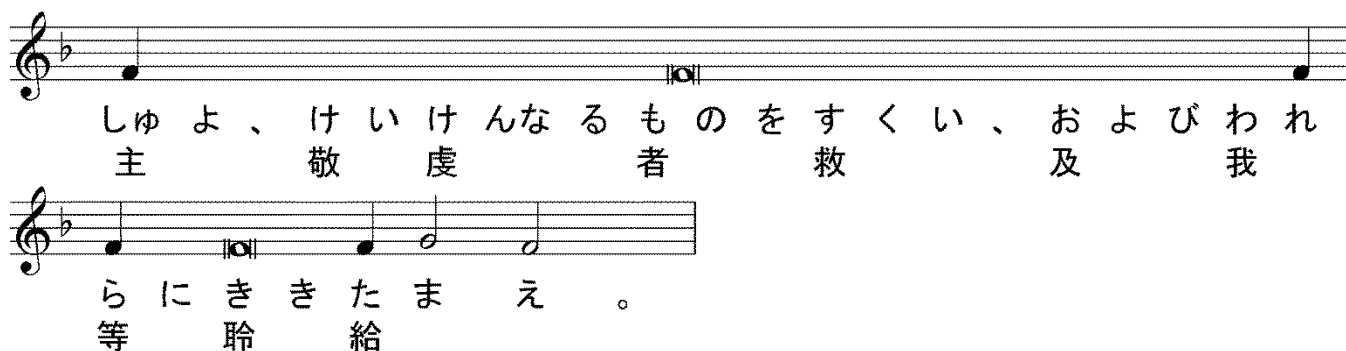
ぢ は 、 わ が き ゅ う せ い し ゅ よ 、 あ ら わ れ て 、
吾 救 世 主 現

ぢ ご く に あ る も の に よ べ り 、 ま た ら く
地 獄 在 者 呼 復 樂

え ん に い れ 。
園 入

【 聖三の歌に代えて 】

代禱) ^{しゅ}主よ、^{けいけん}敬虔なる^{もの}者を^{すく}救い、^{およ}及び^{われら}我等に^き聆き^{たま}給え、



しゅよ、けいけんなるものをすくい、およびわれ
主 敬 虔 者 救 及 我
らにききたまえ。
等 聆 給

代禱) ^{よよ}世世に、



ア ミ ン。



しゅさいよ、われらあなんぢのじゅうじか
主 宰 我 等 爾 十 字 架
にふくはいし、なんぢのせいなる
伏 拜 爾 聖
ふくかつをさんえいせん。しゅさいよ、
復 活 讚 榮 主 宰
われらあなんぢのじゅうじかにふくはい
我 等 爾 十 字 架 伏 拜
し、なんぢのせいなるふくかつをさん
爾 聖 復 活 讚
えいせん。しゅさいよ、われらあ
榮 主 宰 我 等
なんぢのじゅうじかにふくはいし、な
爾 十 字 架 伏 拜 爾



んぢのせいなるふくかつをさんえいせん。
聖 復 活 讃 榮



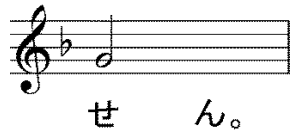
こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも
光 榮 父 子 聖 神 歸 今



いつもよよに、アミン。
何時 世 世



んぢのせいなるふくかつをさんえい
爾 聖 復 活 讃 榮




せん。



しゅさいよ、われらあなんぢのじゅうじか
主 宰 我 等 爾 十 字 架



にふくはいし、なんぢのせいなる
伏 拜 爾 聖

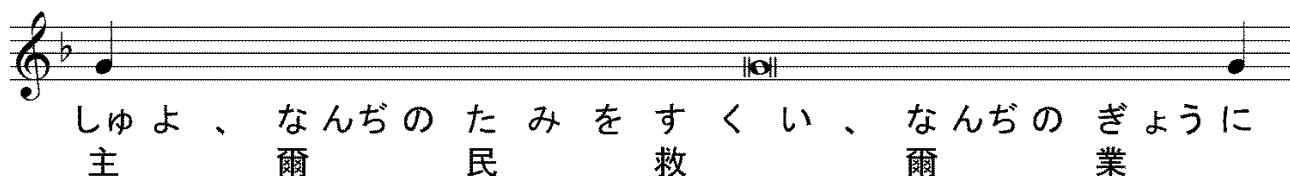


ふくかつをさんえいせん。
復 活 讃 榮

【 提綱 (プロキメン) 大齋第三主日 第6調 】

代禱) 睿智、

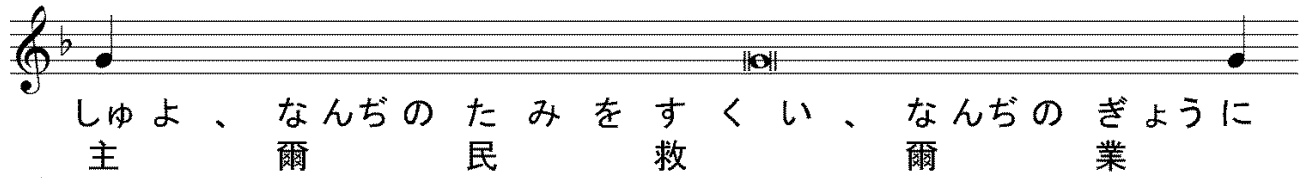
誦經) プロキメン、主よ、爾の民を救い、爾の業に福を降し給え、



しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに
主 爾 民 救 爾 業



誦經) ^{しゅ われなんぢ よ われ かため わ ため もだ なか}主よ、我爾に呼ぶ、^{われ}我の防固よ、^わ我が爲に黙す母れ、



誦經) ^{しゅ なんぢ たみ すく}主よ、^{なんぢ}爾の民を救い、



【 使徒經 (アポストロス) 311 端 エウレイ書4章14節~5章6節 】

代禱) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{せいしと じん たつ しょ よみ}聖使徒パヴェルがエウレイ人に達する書の讀、

代禱) ^{つつし き}謹みて聽くべし、

誦經) ^{けいてい われら おおい しさいちょう しょうん へ もの かみ こあ よ}兄弟よ、我等に、大なる司祭長、諸天を経たる者、イイスス神の子有るに由りて、

^{われら うけとめ かた まも けだしわれら しさいちょう われら にゆうじゃく たいじゅつ あた}我等の承認を固く守るべし。蓋我等の司祭長は我等の柔弱を体恤する能わ

^{もの あら すなわちつみ ほかいっさい こと おい われら ごと ところ もの ゆえ}ざる者に非ず、乃罪の外一切の事に於て、我等の如く試みられたる者なり。故に

^{われら きぜん おんちょう ほうざ つ きょうじゅつ う をり かな たすけ おんちょう}我等毅然として、恩寵の宝座に就くべし、矜恤を受け、機に合う助として、恩寵

^{え ため けだしおよ ひと うち えら しさいちょう ひと ため かみ ほうじ}を獲ん為なり。蓋凡そ人の中より選ばるる司祭長は、人の為に神に奉事することを

^{にん ささげもの まつり つみ ため けん もの むち ものおよ まよ もの あわれ}任ぜられて、礼物と祭祀とを罪の為に献ずる者にして、無智なる者及び迷う者を憐

^{よく けだしみづから またにゆうじゃく まと ゆえ かれ たみ ため ごと おのれ ため}むを能す、蓋自も亦柔弱に纏わる、故に彼は、民の為にするが如く、己の為

^{またつみ あがな まつり けん かつひとだれ みづか こ そんき う すなわちかみ め}にも亦罪を贖う祭を献ずべし。且人誰も自ら此の尊貴を受くるなし、乃神に召

ざる^{もの}者なり、ア—ロンの^{ごと}如く^{しか}然^かり。是^{ごと}くの如くハリストスも、自^{みづか}ら^{しさいちよう}司祭^{そんえい}長の^{もつ}尊栄を以
 て、己^{おのれ}に^き帰せしに^{あら}非^{すなわちかれ}ず、乃^{なんぢ}彼に、爾^{われ}は^こ我の子、我^{われ}今日^{こんにち}爾^{なんぢ}を生^うめりと、言^いいし者^{もの}な
 り、又^{また}他^{たしょう}章^いに云^{ごと}えるが如^{なんぢ}し、爾^{はん}メルキセデクの^{したが}班^{しさい}に^な循^{よよ}いて^{いた}司祭と^{たり}為^りり、世^よ世^よに^{いた}返^{らん}ら
 と。

(比較用 口語訳) わたしたちには、もろもろの天をとおって行かれた大祭司なる神の子イエスがいます
 のであるから、わたしたちの告白する信仰をかたく守ろうではないか。この大祭司は、わたしたちの
 弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、
 わたしたちと同じように試練に会われたのである。だから、わたしたちは、あわれみを受け、また、恵
 みにあずかって時機を得た助けを受けるために、はばかることなく恵みの御座に近づこうではないか。
 大祭司なるものはすべて、人間の中から選ばれて、罪のために供え物といけにえとをささげるように、
 人々のために神に仕える役に任じられた者である。彼は自分自身、弱さを身に負っているので、無知な
 迷っている人々を、思いやることができると共に、その弱さのゆえに、民のためだけではなく自分自身
 のためにも、罪についてささげものをしなければならないのである。かつ、だれもこの栄誉ある務を自
 分で得るのではなく、アロンの場合のように、神の召しによって受けるのである。同様に、キリストも
 また、大祭司の栄誉を自分で得たのではなく、「あなたこそは、わたしの子。きょう、わたしはあなた
 を生んだ」と言われたかたから、お受けになったのである。また、ほかの箇所でもこう言われている、「あ
 なたこそは、永遠に、メルキゼデクに等しい祭司である」。

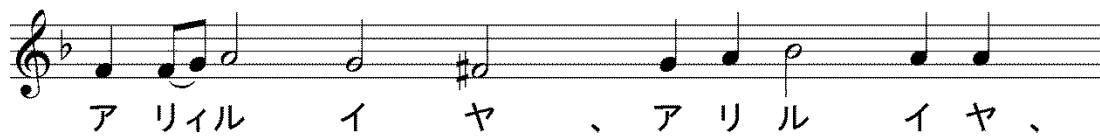
【 アリルイヤ 大齋第三主日 第1調 】

代禱^{えいち} 睿智、

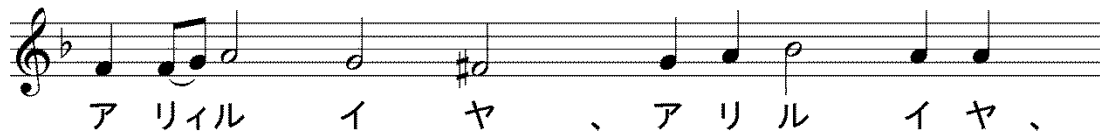
誦經) アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、



誦經) 爾^{なんぢ}が^{いにしえ}古^えより^{なんぢ}獲^{かい}たる^{きおく}爾の會^をを記憶^{せよ}せよ、



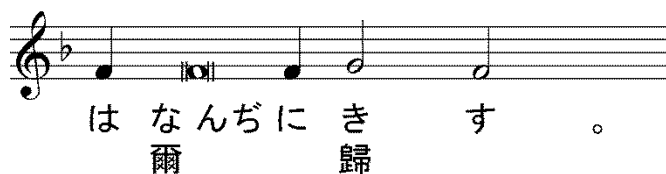
誦經) ^{かみ わ こせい おう すくい ち なか な} 神、我が古世よりの王は 救 を地の中に作せり、



【 福音經 (エヴァンゲリオン) マルコ福音書 37 端 8 章 34~9 章 1 節 】

代禱) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{でん せいふくいんけい よみ} マルコ傳の聖福音經の讀、



誦經) ^{つつし き しゅい われ したが ほつ もの おのれ す そのじゅうじか お} 謹みて聽くべし、主謂えり、我に従わんと欲する者は、己を捨て、其十字架を負

^{われ したが けだしおのれ いのち すく ほつ もの これ うしな われおよ ふくいん} いて我に従え。蓋己の生命を救わんと欲する者は、之を喪わん、我及び福音の

^{ため おのれ いのち うしな もの これ すく けだしひと も ぜんせかい う おのれ たましい} 為に己の生命を喪わん者は、之を救わん。蓋人若し全世界を獲とも、己の靈

^{そこな なん えき そもそもひとに あた そのたましい つくのい な けだしこ} を損わば、何の益かあらん。抑人何を与えて、其靈の償と為さんや。蓋此

^{かんあく よ おい われおよ われ ことば は もの ひと こ そのちち こうえい もつ せい} の姦悪の世に於て、我及び我の言を耻ぢん者は、人の子も其父の光榮を以て聖な

^{てんしら とも きた としかれ は またかれら い われまこと なんぢら つ ここ た} る天使等と偕に来らん時彼を耻ぢん。又彼等に謂えり、我誠に爾等に語ぐ、此に立て

